

鳥羽勝光明院跡出土の孔雀文金具

—発掘された荘厳具から院政期の御堂をイメージする1—

<http://www.kyoto-arc.or.jp>
(公財) 京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



図1a 勝光明院跡出土の孔雀文金具



図1b 首の羽毛（筆者撮影）



図1c 風切羽（筆者撮影）



図1d 冠羽X線写真（龍谷大学提供）

はじめに 平安時代中・後期の京およびその周辺には天皇・貴族により多くの寺院が建立されました。そのほとんどが失われてしましました。宇治の平等院鳳凰堂（天喜元年（1053）建立）は、その姿を伝える希有の存在です。しかし、発掘調査で見いだされた荘嚴具のなかには、在りし日の優美な建築の姿を想像させる名品があります。今回はその一つ、鳥羽の勝光明院跡で発見された孔雀文金具（図1a）を紹介し、その復元と堂内の荘嚴をイメ

ジしてみたいと思います。

発掘された孔雀文金具 勝光明院は鳥羽上皇の御願寺で、保延2年（1136）、阿弥陀堂が建立されました。この阿弥陀堂は平等院鳳凰堂を参考にしており、建設過程では大工や仏師・絵師を鳳凰堂に派遣し、仏像や荘嚴の詳細を記録・報告させています。孔雀文金具はこの阿弥陀堂の前池の中から発掘されました。見つかったのは、頭から胸にかけての大きな部分と、右脚の一部、いくつかの風切羽の断片で、鍍金がほ

どこされています（図1a・b・c）。これらの断片すぐに思い浮かぶのが、岩手県平泉の中尊寺金色堂（天治元年（1124）建立）です。金色堂の須弥壇の格狭間には、この金具にそっくりの優美な孔雀のレリーフ（浮彫）が飾られているのです（図2a）。

復元される姿 金色堂の西南壇の孔雀（図2b）を参考に、勝光明院跡出土金具を復元的に配置してみると、翼を広げ、右脚を持ち上げた、金色堂のレリーフにそっくりな姿



図2a 中尊寺金色堂須弥壇（中尊寺提供）



図2b 同西南壇 孔雀文金具（中尊寺提供）



図3a 浄妙寺本堂須弥壇 孔雀文金具（筆者撮影）

が見えてきます（図1a）。この金具は阿弥陀堂の須弥壇を飾っていたと考えてよいでしょう。大きさを比較すると、金色堂の孔雀の1.5倍ほどで、勝光明院の格狭間は鳳凰堂のものよりやや大きかったと推察されます。

もう一つ、この金具の復元の参考になる事例を紹介しましょう。和歌山県有田市の淨妙寺本堂（薬師堂、国指定重要文化財）です。鎌倉時代後期の建立とされ、建築は江戸時代に改造されていますが、須弥壇は当初のものがのこっています。下部に金箔を貼った蓮弁をまわし、木部には紫檀を模した彩色文様を描き、螺鈿をほどこした優美な須弥壇で、格狭間に金色堂と同じ形式の孔雀文金具を取り付けられています（図3a）。淨妙寺の孔雀文金具では、金色堂と同じように、冠羽（頭の飾り羽）や尾羽（上尾筒）に猪目の形の穴を開けていますが、とくに注目されるのは冠羽に一つだけ石がのこっていることです。光を当てると、この石は鮮やかな

ブルーに光るのです（図3b）。

実際の孔雀の頭には、先端の青い特徴的な冠羽がありますが、ブルーに光る石はこれを表現したものと考えられます。また、孔雀文金具の尾羽にも猪目の穴があります。実際の孔雀の尾羽には、目玉文様のなかに猪目に似たハート形の濃いブルーの玉があるのが印象的で、金具でも冠羽と同じく青い石を入れて、これを表現したと推察されます。金色堂の孔雀文金具も、冠羽と尾羽に同じ猪目の穴があるので、当初はブルーに光る石がはめ込まれていたと推察されます。そして、勝光明院の孔雀もX線写真では、冠羽の猪目がはっきりわかります（図1d）。尾羽の猪目は見つかっていませんが、おそらくは同じ形式だったのでしょう。

華麗を究め、莊嚴を尽す 全体の姿がイメージできたところで、もう一度、勝光明院の孔雀文金具を見てみましょう。首や胸では羽毛が一枚一枚やわらかく押し出され、中心を通る羽軸を浮き出させ、そこから



図3b 同孔雀文金具 冠羽の石（筆者撮影）

広がる羽弁まで表現しています（図1b）。また翼の風切羽と推定される部分でも、驚くほど繊細な羽弁の表現がみられます（図1c）。この孔雀は金具なのですが、その優美さをそなえた超絶技巧は、まるで若冲の老松孔雀図・老松白鳳図（18世紀中期、皇居三の丸尚蔵館蔵）などの細密な絵画を見ているかのようです。九条兼実は日記『玉葉』建久3年（1192）10月2日条に、勝光明院は白河法皇の証金剛院とともに「華麗を究め、莊嚴を尽す」と記しており、この孔雀文金具の断片に、その華麗な姿を垣間見ることができるのです。

（京都大学 富島義幸）